

日本語と中国語のモダリティの対照研究

—言語類型論の観点から—

玉地 瑞穂*

A Contrastive Study of Modality in Japanese and Chinese

— A Linguistic Typological Perspective —

Mizuho Tamaji

Abstract

Modality, a mode of speech act, in the second language learning is considered as one of the most difficult grammatical features. Linguistic typology analyzing both language-universal and language-specific features is a useful method for contrastive linguistics, and its contribution to the area of second language acquisition is highly expected (Comrie, 2003).

The aim of this study is to clarify the characteristics of modality in Japanese and Chinese on the basis of a typological study of modality by Palmer (2001). The results of this study are summarized: ① modal systems of both Japanese and Chinese are composed of several morphologically different forms, ② auxiliary verbs in Chinese modal system are polysemy, ③ the development of grammaticalization chain of modality in Japanese is dynamic > deontic/epistemic and that in Chinese is dynamic > deontic > epistemic, ④ hierarchy among the modal markers exists in both languages.

キーワード: 言語類型論, モダリティ, モーダルマーカ, 文法化の連続性,

Key words: Linguistic typology, Modality, Modal markers, Grammaticalization chain

1. はじめに

我々が、一定の内容について述べる文を構成するには、その内容となる事態に対して、文としてのさまざまな「述べ方」、すなわち発話の様式 (mode) を選択しなければならない。言い換えれば、話し手が独立した言語行為をするなら、その事態に対する話し手の把握の仕方は必ず表示されなければならないのである。そこで、この「述べ方」や「発話

* 提出年月日2005年6月30日 高松大学経営学部経営学科講師

の様式」を表す部分をモダリティという。

日本語はモダリティが比較的発達した言語であり、モダリティは外国人学習者にとっては習得が難しい文法の1つである。モダリティの研究は日本語学の分野では多く見られるが、他の言語との対照研究や第二言語習得研究としての日本語のモダリティ研究はあまり見られない。

言語類型論は言語間の普遍性と個別性の両面を捉え、間言語的一般化を提示する。言語類型論は対照研究の結果をより普遍的な視点から記述することができるだけでなく、対照研究の結果の第二言語習得研究への貢献が期待される (Comrie, 2003)。本研究は中国人日本語学習者のモダリティ習得の過程を言語類型論の観点から分析し、第二言語習得における認知と母語の関係を考える認知類型論の研究の第一段階として、言語類型論の手法によって日本語と中国語のモダリティの対照研究を行うことを目的とする。本研究の構成は以下のとおりである。2節では本研究の分析の理論的枠組みとして採用するPalmer (2001)の類型論的モダリティ論を紹介する。その説明の例文には主に英語の例を用いることとする。3節、4節ではそれぞれ日本語のモダリティ体系と中国語のモダリティ体系を言語類型論の観点から分析し、5節、6節では考察、7節では結論を述べる。

2. Palmer (2001) によるモダリティの類型論的研究

2.1 言語学におけるモダリティ研究とPalmerによるモダリティの類型論的研究

モダリティは言語学的視点から主に3つの方法で定義される。1つ目は、モダリティは話者の態度の表現または主観性の表現、話者の意見や感情を表現するという考え (Lyons, 1968, 1977, Palmer, 1986, Bybee, 1994, 仁田, 1989, 2000) 2つ目はモダリティは命題の外側にあるすべての言語学的表現を含む何かであるという考え (Fillmore, 1968), 3つ目はモダリティは現実／非現実あるいは事実性の違いを表現するものという考え (Givon, 1995, Palmer 1998, 2002, Narrog 2002, 野村, 2003) である。またこれらのうちの1と2を統合したもの (中右, 1994) もある。モダリティを1, 2のような立場から捉えると、モダリティ以外の部分をすべて命題と考え、機能の異なる複数のモーダルマーカが存在する場合は客観的な内容を表す部分と主観的な意見を表す部分を区別することが困難であるなどの問題がある。

言語類型論の観点からなされたPalmer (2001) のモダリティ研究では、モダリティを

Realis（現実的なものに言及するもの）とIrrealis（非現実的なものに言及するもの）という二分立と定義¹⁾し、文法形態で表されるムードと法助動詞などの語彙形態によって表されるモーダルシステムから成り立っており、これらの複数の形態は互いに排他的ではないと考えている。

2.2 ムード（Mood：叙法）

ムードに関しては、典型的にすべてあるいはほとんどがプロトタイプの二分立である現実と非現実に関係している。顕著な例として、ヨーロッパ言語のIndicative（指示）とSubjunctive（叙法）の対立においてIndicativeは現実、Subjunctiveは非現実に対応している。厳密に言えば、Indicative/SubjunctiveとRealis/Irrealisの間に類型論的な違いは存在しない。どちらも現実と非現実という概念的特徴の違いを表現し、現実／非現実という類型論的カテゴリーの例として見られるということである。

この現実／非現実の対立がプロトタイプの二分立であると言っても、例外がある。1つは、Imperative（命令形）とJussive（命令形）はIndicative/Subjunctiveの対立の外側にある。2つめは、現実と非現実のマーカがあるときは、いくつかの文はこの区別のために無標のものがあることである。

多くの言語において命令形は確認されているが、英語においてはモーダルシステムとは独立したモーダル動詞によって表される。概念的に命令形はDeontic modalityと類似している。それらははっきりとある権威を拠り所とした指示的で、要求を意味している。命令形は命令を与えるだけでなく許可や助言も表す。また、命令形は話者が実際に話しているという行為において命令を与えるという意味で行為的で主観的である。この理由において、指示と違って命令形は従属節の中で使用されない。Lyons（1977）は、命令形は第2者に対してのみ発せられ、第3者あるいは1人称には使用されないことから、1人称と3人称に使用される命令形はJussiveと呼びImperativeと区別している。

2.3 モーダルマーカとモーダルシステム

モーダルシステムは語彙形態によって表現され、無標形式でRealisを意味する平叙文に対立し、有標形式でIrrealisを意味するものである。このモーダルシステムを表す語彙形態はモーダルマーカと呼ばれる。モーダルマーカに助動詞を使用するのはヨーロッパ言語における典型的な特徴であるが、ヨーロッパ言語に限定されているものでもない。英語

では、MAY, CAN, MUST, OUGHT TO, SHALLなどの助動詞が使用され、これらの助動詞はモーダル動詞と呼ばれる。Huddleston (1976, p. 33) は、これらのモーダル動詞の特徴を表す言葉、Negation (否定形) , Inversion (語順変化) , Code, Emphatic affirmation²⁾, の頭文字をとってNICEと定義した。これらの特性はHAVEやBEなどの他の助動詞と共通するものであるが、これら独自の特徴もある。

1. これらは互いに共起しない。たとえば、will can comeという文章は成り立たない。
2. これらは3人称単数現在形を示す-sという形を取れない。
3. 不定詞形がない。
4. 命令形がない。
5. MUSTには形態論的な過去形がない。他のものには過去形があるが、CANの過去形であるCOULD以外は過去に対する言及ができない。
6. 否定の縮約形がある。
7. DeonticとEpistemicを意味するときには否定形とテンスにおいて形式的な違いがある。

モーダルシステムは、Epistemic, Evidential, Deontic, Dynamicという4つのモダリティに分けられる。このうち、EpistemicとEvidentialは話者の命題の真実性にかかわる言及をするのでPropositional modality (命題的モダリティ) , DynamicとDeonticは実現されない出来事や実際には起こらないが起こる可能性のある出来事について言及するのでEvent modality (出来事のモダリティ) という上位概念でまとめることができる。以下、モーダルシステムを構成するモダリティのカテゴリーとモーダルマーカを概観する。

(1) Epistemic modality

Epistemicという言葉は、ギリシャ語で「知識」を意味する*epistēmē*という言葉から派生したもので、話者の命題の事実性に対する判断を表す (Lyons, 1977, p. 434)。一般に、言語において判断を表すものには不確実性を表すもの、観察できる証拠からの推論を表すもの、一般的に知られているものからの推論を表すものという3つのタイプがある。これら3種類の判断は、類型論的にはそれぞれ、Speculative (推測、あるいは蓋然性判断) , Deductive (当然の帰結あるいは必然性判断) , Assumptive (仮定) と呼ばれる。多くの言語におけるEpistemic modalityには3つのうちの2つの対立しか見られないが、例外的に英語

においては、MAY, MUST, WILLという3つのモーダルマーカ―を用いて表現することができる。

- ① John may be in his office. (Johnは事務所にいるかもしれない。)
- ② John must be in his office. (Johnは事務所にいるにちがいない。)
- ③ John will be in his office. (Johnは事務所にいるだろう。)

①は話者はJohnが事務所にいるかどうかについて不確実である、②は例えば事務所の記が着いているので家に帰ったのではないという事実に基づいて、話者は証拠に基づいてJohnが事務所にいるということを確信している、③はJohnについてすでに知られている事実(たとえば毎日9時まで事務所にいるなど)に基づいて判断したということの意味している。

①と②におけるMAYとMUSTの違いは結論の強さで、MAYは認識的に可能なことを意味し、MUSTは認識的に必然なことを意味している。これがSpeculativeのMAYとDeductiveのMUSTの違いである。②と③の対立は、観察による推論と経験や常識による推論の違いであり、つまりDeductiveのMUSTとAssumptiveのMAYの違いである。

いくつかの言語において、判断の強さを表す方法がある。英語においては、モーダル助動詞の過去形を用いて、暫定的な軽度の判断を表すことがある。MAYやWILLに関しては過去形であるMIGHTやWOULDを用いる。MUSTは過去形を持たないので、同義語のOUGHT TOやSHOULDを用いる。CANはEpistemicのマーカ―ではないが、その過去形のCOULDはある種の推断を表す場合に使われる。

(2) Evidential modality

話者の命題の事実性に対する証拠性を表す。証拠性に関係するもの全般を扱うものをEvidential modalityというが、基本的に証拠性を表すものにはReported (報告によるもの)とSensory (感覚によるもの)の2つしかない。

Reportedはさらに直接的目撃者である人物から聞いた情報を話者が報告するもの直接的目撃者ではない人物から聞いた情報を話者が報告するもの、話者がすでに確立された口頭による伝承の一部としての状況を報告するものなどがある。これらはそれぞれ'Quotative', 'Hearsay', 'Folklore'と命名することはできるが、'Folklore'という呼び方は誤解を招きやすいのでこれらは一般的に'Reported (2)', 'Reported (3)', 'Reported (Gen)'と呼ばれる。しかし、多くの言語においてはこれらのタイプすべてに同じモーダルマーカ―が使われる場

合が多い。

Sensoryについては、いくつかの言語においては1つのカテゴリーしか存在しないが、他の言語にはVisual（見ることによって得た証拠）とAuditoty（聞くことで得た証拠）がある。しかし、実際にはSeansoryという1つのカテゴリーからなる場合、見ることとそれ以外の方法で得た証拠、見ることと聞くことで得た証拠という分類方法である。英語においてはEvidential modalityを表すモーダルマーカ―は特に明記されておらず、CANが推測の結果として使用されるという記述にとどまっている。

(3) Deontic modality

Deonticという言葉は、「拘束されるもの、義務」を表すギリシャ語の*déon*という言葉から派生したもので（ODEE 1966 [1969, p. 257]）、Deontic modalityは「道徳的に責任のある行為者によって遂行される行為の必然性や可能性に関するもの」（Lyons, 1977, p. 428）である。

文中の主語とされる人物の行動を規制する要素が外部に存在する。つまり、主語となる人物は許可されたり命令されたりし、その行動を規制する人物（しばしば話者である）はある種の権威に依拠している。

Deonticは英語においてはMAYとMUSTによって表される。口語ではMAYよりCANのほうが好んで使用される場合が多い（Palmer 1990, p. 71）がMAYのこの用法は消滅していない。

- ① You may/can go now. （あなたは今行ってもよい。）
- ② You must go now. （あなたは今行かなければならない。）

①は許可、②は義務を表すので、それぞれ‘Permissive’（許可能的なもの）、‘Obligative’（義務的なもの）と呼ばれる。

Epistemicのモーダルマーカ―が暫定的で弱い判断を表すために過去形を用いるように、deonticもモダリティの力を弱めるためにいくつかのモーダルマーカ―の過去形を用いることがある。MUSTはSOULDとOUGHT TO、MAYとCANにはそれぞれMIGHTとCOULDがある。形態論的に言えば、SHOULDはSHALLの過去形であるが、概念的にMUSTの変形として機能する。MAYとCANには過去形が存在するが、それらがdeonticのモーダルとして使用されることはない。なぜなら、過去の行為を許可したり義務付けたりするということはできないので、これらの過去形がdeontic用法として使われることはない。

Deonticのモーダルはしばしば話者から発せられる許可や義務を指示しているが、これらがいつも主観性を持っているわけではない。また、一般的に話者が許可や義務に同意していることを暗示している場合がある。この違いは英語においてはMUSTとHAVE TOによって表される。

① You must come and see me tomorrow.

② You have to come and see me tomorrow.

①では、提案または招待を表しているのに対し、②では話者とは関係のないある理由によって聞き手にある行為を強制することを意味している。

概念的に、命令形はdeontic modalityと密接に関連している。命令形は明らかに指示的で、通常要求を指示するものと記述される。実際に、命令形は最も強い指示で、権威のある人物によって発せられたもので、聞き手が服従しないことを期待しない。

(4) Dynamic modality

文中の主語とされる人物の行動を規制する要素が内部に存在する。つまり、主語となる人物の能力や意思によってその行動を規制される。能力は主語の実際的な能力を表す場合もあるが、主語がある行動をとることを可能にしたり不可能にしたりする一般的な状況として解釈される場合がある。

Dynamicを構成するものは、「能力」と「自発性」でそれぞれAbilitive, Volitiveと呼ばれ、英語ではCANとWILLで表される。すでに見られるように、CANはEpistemicとDeonticのモダリティとしても機能する。同様に許可を表すモーダルマーカ―も能力を表すことがあり、多くの言語においては許可と能力の形式の区別はない場合がある。また、DynamicのCANは身体的・心理的能力に対する言及だけでなく、人々が関係している環境も含まれている。

(5) モダリティの文法化の連続性 (Grammatical chain)

モーダルシステムを構成するモダリティを概観したが、1つのモーダル動詞がDynamic, Deontic, Epistemicの3つのモダリティとして機能していることが分かった。概念的に、Epistemic modalityとDeontic/Dynamic modalityの間には、あまり共通点が見られるようには思われない。先述したようにEpistemicは話者の命題の真実性に対する態度の表明で、DeonticとDynamicは出来事が実現されるか、または出来事が実現される可能性があるかに

ついて言及するものである。しかし、英語あるいは他の多くの言語においては、同じモーダルマーカーが両方のタイプのモダリティとして機能する。例えば、次の例はEpistemicとDeonticの意味で解釈され得る。

- He may come tomorrow. ①彼は明日来てもよい。(Deontic)
②彼は明日来るかもしれない。(Epistemic)

- The book should be on the shelf. ①その本は机の上にあるべきだ。(Deontic)
②その本は机の上にあるはずだ。(Epistemic)

同様に、このことはDeonticとDynamicの間にも見られる。例えば、次のような例は、DeonticにもDynamicにも解釈されうる。

- He can come in now. ①彼は今入ることができる。(Dynamic)
②彼は今入ってもよい。(Deontic)

この現象を簡単に説明したものが、可能性と必然性の対立(Possibility/Necessity)である。Lyons (1977, p. 787)によれば、これは「伝統的なモーダルロジックの中心的概念」である。例えば、EpistemicのSpeculativeとDeductiveは、それぞれEpistemically possibleとEpistemically necessaryと解釈される。同様にDeonticのPermissiveとObligativeはそれぞれDeontically possibleとDeontically necessary, DynamicのAbilitiveとVolitiveはDynamically possibleとDynamically necessaryを意味する。このように、可能性と必然性という概念はモーダルシステムにおいては重要な概念である。

そして、Epistemic modalityとDeontic/Dynamic modalityに同じモーダルマーカーが使用されることについては、力のダイナミクスによって意味拡張を引き起こしたと考えられる(Talmy, 1998)。意味変化や意味の拡張を促す重要な要因のひとつとして、外部世界の物理的な力のダイナミクスが、われわれの試行や判断にかかわる認識の世界に投影され、意味の拡張が引き起こされる場合である。Sweetser (1991)は、MUSTの認識的な用法に関して、その時点で得られる証拠が主体を強制的に問題の判断(ないしは結論)に導いているという解釈をしている。これを力のダイナミクスの視点から見た場合、ある権威を持った存在が問題の主体を強制的にある行為に導くという解釈と基本的に同じ力動的

な解釈を持っていることが理解される。このように、許可と可能性にかかわる概念と義務と必然性にかかわる概念は、それぞれ根源的な意味を基本に反映し、可能性と必然性の認識的な意味はそれぞれ許可と義務を反映する根源的な図式からの拡張概念として理解していくことが可能となる。

このように、語彙要素が動的、連続的に変化する過程を捉えることを「文法化」(Grammaticalization) という。文法化は変化の過程を歴史的に捉えるのが普通であるが、共時的な現象にも適用することが可能である (Heine, 1993)。モーダルシステムにおいて、力のダイナミクスが物理的な世界 (Dynamic) > 社会的な世界 (Deontic) > 認識的な世界 (Epistemic)³⁾ という方向に拡張されることから、Dynamic > Deontic > Epistemic の順にモダリティの文法化の連鎖が起こったということ (Grammaticalization chain) を表しており (van der Auwera & Plugian 1998)、類型論的に普遍的な連鎖の順番は Dynamic > Deontic > Epistemic であると言われている (Bybee, 1985, Bybee et al., 1994, Palmer, 1986, 2001, Nordlinger & Traugott, 1997)。

以上のPalmerの類型論的モダリティ研究の結果を英語を例にモーダルシステムにおけるモーダルマーカ―とモダリティの対応関係をまとめたものが図1である。この図においてはEvidential modalityが含まれていないのは、Evidentialが可能性と必要性という概念で分類できない、したがって、力のダイナミクスによって派生したものでないからである。また、英語のEpistemic modalityにはSpeculative, Deductive, Assumptiveという3つの対立が見られるが、類型論的には多くの言語においては2つの対立しかないし、伝統的モダリティの可能性／必然性の対立にAssumptiveは含まれないので、この図でもAssumptiveは省略することとする。

以下、Palmerの類型論的モダリティ論の理論的枠組みに従って、日本語と中国語のモダリティ体系の分析を試みる。まず、日本語と中国語のモダリティの先行研究を概観し、それらをPalmerの理論にしたがって分析することとする。

Possibility		
Event modality		Propositional modality
Dynamic possibility (Abilitive)	Deontic possibility (Permissive)	Epistemic possibility (Speculative)
Can	May Can	May, Might Will, Would Can
Dynamic necessity (Volitive)	Deontic necessity (Obligative)	Epistemic necessity (Deductive)
Will	Must Have to Shall	Must Ought to Should
Event modality		Propositional modality
Necessity		

図1 Palmerによるモーダルシステムの構成とモーダルマーカの分布

3. 日本語のモダリティ

3.1 日本語のモダリティ体系の研究

日本語のモダリティ研究における主なものは、階層的モダリティ論、叙法論的モダリティ論などがある。階層的モダリティ論は、文は客観的事柄内容である「命題」と話し手の発話時現在の心的態度（命題に対する捉え方や伝達態度）である「モダリティ」からなり、モダリティが命題を包み込むような形で階層構造化されていると考える。このようなモダリティを命題の対立概念として話し手の心的態度と規定する立場の研究者には、中右、仁田、益岡らがいる。この立場に立てば、必然的に命題以外はすべてモダリティだということになり、質やレベルの異なるさまざまな要素を抱え込むことになる。そこで、この立場の研究者の見解の相違は、モダリティの下位類化・階層化をどのように行うかということに現れる。

叙法論的モダリティ論（尾上，2001）は、主観・客観二分論的なモダリティ論と対立するものとして、山田孝雄の叙述論を継承しつつ、叙法論の視点から、述定形式の全体組織の中にモダリティを位置づけようとする立場である。そして、モダリティの概念は専用の

述定形式をもって非現実の事態を語るときに生ずる意味である（尾上，2001，p. 485）。この立場に立てば，終助詞や文の種類は，モダリティとは質の異なるものであり，テンス・アスペクトなどの述語のほかの側面とモダリティとの関係を考えながら，叙法の組織として，それらを統一的に理解していくという方法がとられることになる。しかし，これらの理論では日本語のモダリティの意味・機能と形式を十分統一的に説明できていない。

これらに対して，宮崎他（2002）のモダリティ論は，モダリティとは文の伝達的なタイプと密接に関係する概念であると考え，モダリティをモーダルな意味とそれを表現する文法形式の関係の体系であると考えている点でPalmerの理論と共通している。したがって，本研究においては宮崎らのモダリティ論を採用することにする。

3.2 宮崎ら（2002）のモダリティ研究

宮崎らは，モダリティを「実行」と「叙述」の対立と考え，これらを「基本叙法」と呼んでいる。この「基本叙法」の対立は，人称の対立と連動している。すなわち，「意思」は1人称者を，「命令」は2人称者を主語にとり，「叙述」には人称の制限がない。

次に，品詞性や語彙の意味の関与の有無である。「叙述」が述語となる単語の品詞製や語彙の意味の制限がないのに対し，「意思」「命令」には，意思によって制御可能な動作を表す動詞にしか分化しない。

さらに，当該文に主語を置く，置かないといった構文上の対立を持つのは，「叙述」のみが有する特徴である。また，「意思」「命令」は，それ自体に人称性が潜在するので，情動的には行為者（1人称者・2人称者）を明示する必要はない。

「基本叙法」は基本的には単語の文法的な語形という文法形式によって表されるものである。語形変化の中で最も基本的・中心的なものは動詞の「活用」である。これは，動詞の終止形の語形との対立関係として存在している。この活用という表現手段によって表し分けられる「意思」，「命令」，「叙述」を形態論的カテゴリーとしてのムードの中で，最も基本的・中心的な位置を占めることから「基本叙法」と呼ばれる。しかし，これだけではモーダルの意味の具体化・細分化には十分ではないので，さまざまな文法的・語彙的表現を駆使する必要がある。そうした基本叙法からモダリティへの表現手段・表現内容の拡大の第一歩として基本叙法の各形式は，活用以外の形態的な手段によって作られる，「否定」，「疑問」，「推量」である。また，基本叙法レベルではないが意味・機能的なレベルでは，これらに加えて「疑問」のモダリティ，「説明」のモダリティを取り上げて

いる。また、すべてとの関係が問題になる終助詞の機能については、テキスト・談話レベルで機能するモダリティと定義している。これらをまとめたもので、下の図2である。以下、それぞれのモダリティについて説明するが、このうち疑問のモダリティと説明のモダリティはPalmerの類型論的モダリティ研究には普遍的なカテゴリーとして扱われていないので、本研究においても省略することとする。

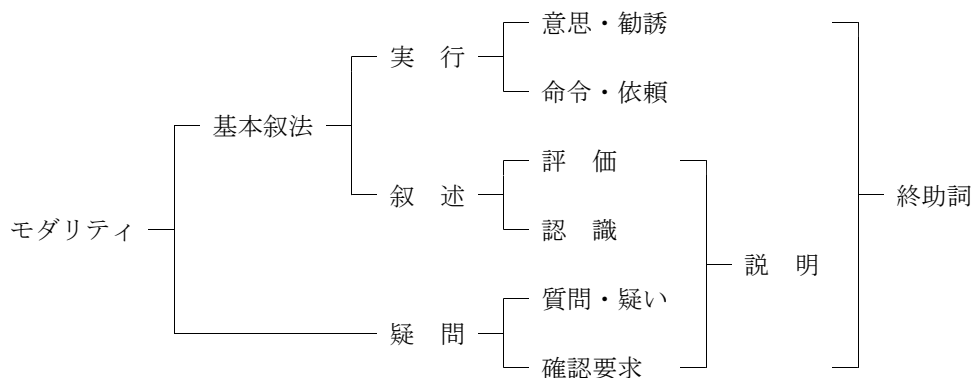


図2 宮崎らによる日本語のモダリティ体系（宮崎ら 2002）

(1) 実行のモダリティ

実行のモダリティの中核をなすのは、基本叙法の意思と命令であるが、実行の主体に2人称を引き込むことによって、意思から勧誘が派生し、受益表現が命令と結びついて依頼へと展開する。意思・勧誘のモダリティ形式として「～う」「～よう」などを挙げている。命令と依頼は明確に区別されるものではなく、連続するものであるが、命令が聞き手にその行為の実行を強制するのに対して、依頼は聞き手に対する強制が欠けており、あくまでその実行の諾否については聞き手に決定権があるという違いがある。命令のモダリティ形式には「～しろ」「～しなさい」、依頼のモダリティ形式には「～てくれ」「～てください」「～して」、などがある。否定の命令あるいは否定の依頼である禁止を表す「～するな」がある。これらは基本叙法に分類されていることからわかるように、動詞の活用形に補助動詞が接続したものである。

(2) 叙述のモダリティ

叙述のモダリティは評価のモダリティと認識のモダリティからなる。

(2)－1 評価のモダリティ

評価のモダリティは、ある事態が実現することに対する、「必要だ、必要でない、許容される、許容されない」といった評価を表す。従来の研究では「当為判断」「価値判断」などと呼ばれることがあったが、これらの言葉が指すのは、「～するべきだ、～するべきではない」といった表現に代表される、人の行為の必要性、許容性についての判断である。一方、評価のモダリティという言葉を使うことによって、「～ばいい」などのように事態が実現することに対する願望を表す用法を含んでいる。

基本的意味によって必要妥当系（ある事態が必要もしくは妥当という評価を表す：「～といい」「～ばいい」「～たらいい」「～なくてはいけない」「べきだ」）、不必要系（ある事態が必要ではないという評価を表す：「～なくてもいい」「までもない」）、許容系（ある事態が許容されるという評価を表す：「～てもいい」）、非許容系（ある事態が許容されないという評価を表す：「～てはいけない」）という4つに分けることができる。この他、勧めを表す「～たらどうか」「～といい」、禁止を表す「～てはいけない」等も含まれる。

評価のモダリティは形式の上から見ると、3つのグループに分けられる。1つは評価的複合形式と呼ばれ、「～といい」「～なければならぬ」「～てはいけない」のように事態を受ける形式（～と、～なければ）と評価形式（いい、ならない、いけない）から成り立つ複合的評価形式と呼ばれるものである。2つ目は「べきだ」「ものだ」「ことだ」のような助動詞、3つ目は「ざるを得ない」「ないわけにはいかない」のようなそのほかの複合形式と呼ばれるものである。

これらの複合形式は条件文から成り立っている。条件文の成立の仕方を自然言語一般に当てはまる現象と考えて説明するDesirebilityの仮説（赤塚，1998，p.14）によれば、自然言語の条件文の前件と後件の間には「前件が成立すれば、後件が実現する」という相互依存関係が存在する。つまり、次のような関係である。

A : DESIRABLE-LEADS-TO-DESIRABLE

B : UNDESIRABLE-LEADS-TO-UNDESIRABLE

この相互依存関係のおかげで話し手の意図と心的態度が働き、条件文を使っていろいろな発話行為を遂行することができることから、複合形式という語彙形態が発展したものだ

と考えられる。

(2)－2 認識のモダリティ

認識のモダリティは文の対照的な内容としての事態に対する話し手の認識的なとらえ方を表す文法カテゴリーで、日本語学においては従来いわゆる推量系の助動詞の語法研究という形を取ってきた。認識のモダリティには、「だろう」や「かもしれない」、「らしい」「はずだ」などが挙げられる。このうち、「だろう」は「かもしれない」や「らしい」など他の認識のモダリティの形式とは異なった性質を持っている。具体的には常に発話行為時における話し手の推量を表す、「だろうか」という疑問形を持つ、「かもしれないだろう」「しなければならないだろう」というように、他のモダリティ形式に接続することができる。このように「だろう」は基本叙法にも匹敵し、また無標形式とも対立をなしているので、真性モダリティ（尾上，2001）や第1次的モダリティ（益岡，1999）などと呼ばれることもあるが、宮崎らは「だろう」を「認識（推量）のモダリティ」ではなく「推量のムード」というカテゴリーとして定義している。

認識のモダリティは、形態論的には無標形式と「だろう」との対立として存在するのだが、用言のテンス形式に接続してその事柄を直接確認していないことを表す、という性質を持つ。これらの形式があらわす認識的な意味の類型については、既に多くの考察がある。これらを「判断のモダリティ」を表す形式ととらえ、判断の確かさ（蓋然性）を表す形式と証拠性に基づく判断を表す形式とに大きく2分類する考え方がある。そして、前者を構成する形式には「かもしれない」「にちがいない」「はずだ」、後者を表すものには「ようだ、みたいだ、らしい、（し）そうだ、（する）そうだ」が挙げられている。

(3) 終助詞の機能

日本語において、モダリティを表す形式の一つに、終助詞がある。文末に現れる助詞であり、会話では頻繁に用いられる。どこまでを終助詞として認めるかについて、共通の認識があるわけではないが、あまり問題がないものをあげると「よ」「ぞ」「ぜ」「わ」「さ」「ね（え）」「な（あ）」である。

これらの中で（伝達）を表すと考えられるのが「よ」「ぞ」「ぜ」「わ」「さ」、同意・確認を表すと考えられるのが「ね（え）」「な（あ）」である。

3.3 言語類型論から見た日本語のモダリティ体系

以上、日本語のモダリティ体系を概観したが、まずわかることは日本語のモダリティにおいては語彙形態で表されるものよりも文法形態で表されるものが多いということである。このことが原因で、類型論的にはモーダルシステムとして分類されるべきものが日本語においてはムードと見なされていると考えられる。

(1) ムードについて

宮崎らは「叙述」を「実行」とともに基本叙法を形成するものだと考えている。これらのうち、無標形式で表される平叙文はIndicative/Subjunctiveに相当するので、ムードと考えることができる。「実行」のモダリティのうち「命令」「依頼」は概念的にはImperative/Jussiveに相当するが、これらは第2人称だけが主語になりうるので、Imperativeのみに相当する。これらは動詞の活用形に補助動詞が接続するという文法形態の変化で表されることからムードに相当する。

また、ムードを表す手段として、否定・疑問という類型論的に普遍的な文法形態以外に、「だろう」のような「推量」のムードが存在するのは日本語のモダリティに固有の特徴である。日本語は他の言語に比べて「推量」という概念が発達しているといわれるが、「推量」のムードが存在することからもこの見解は支持される。

(2) モーダルシステムについて

次に、モーダルシステムを構成するDynamic, Deontic, Epistemic, Evidentialという4つのモダリティに相当する日本語のモダリティを考える。

(2) - 1 Dynamic modality

Dynamic modalityのうち、Volitiveには「意思」「勧誘」のモダリティが相当するだろう。類型論的に言えばDynamic modalityはモーダルマーカという語彙形態で表されるが、日本語においては「～う」「～よう」「～たい」という動詞活用形という文法形態で表される。

宮崎らの研究ではAbilitiveの概念を意味するものはモダリティと考えられていない。Abilitiveに相当するものとしては「～える」「～られる」「～できる」という可能形とよばれる動詞の活用形が相当すると思われる。これらが日本語においてモダリティと考えら

れていない理由は、宮崎らのモダリティ論では基本叙法を人称による対立によって分類しているからだと思われる。人称による対立によれば、「意思」「勧誘」は1人称者、「命令」「依頼」は2人称者を主語とし、「叙述」は人称による主語の制限がないと考えている。Abilitiveに当たる可能形の使用において、主語の人称制限は存在しない。したがって、「可能」のモダリティを「実行」のモダリティの中で「意思」「勧誘」に対立するモダリティとして確立するのは矛盾していると考えたのであろう。

しかし、この人称制限によるモダリティのサブカテゴリー化することは意味があるのだろうか。類型論においてはこのような考え方はないし、「意思」の「～たい」は1人称者主語にしか用いられないが、「～たがる」というように補助動詞をつければ「意思」のモダリティの使用範囲を3人称者主語にまで拡大することもできるからである。

(2) - 2 Deontic modality

叙述のモダリティのうち、「評価」のモダリティはDeonticに相当すると思われる。評価のモダリティは概念的には必要妥当系、不必要系、許容系、非許容系に分けられているが、不必要系と非許容系はそれぞれ必要妥当系と許容系の否定形と考えることが可能であるので、ここでは考慮に入れないことにする。必要妥当系はObligative、許容系はPermissiveにそれぞれ相当すると考えられる。

先述したように、日本語のムードの中にはImperativeに対立するJussiveは存在しないのは、人称による制限があるためである。JussiveはDeonticのObligativeと概念的に類似しており (Palmer 2001, p. 48), 「評価」の上位概念である「叙述」のモダリティには主語の人称制限がないことから、日本語においてはObligativeがJussiveを含んでいると考えることができる。

また、宮崎らの言う「許容系」の中には含まれていなかったが、「～できる」などの動詞の可能形は、個人の身体的・心理能力だけでなく、状況が個人にある行為をすることを可能にする、つまり「許容」の意味でも使用されることができるので、Permissiveにも分類することができると思われる。

以上のことを考慮して、Deonticにおける語彙形態の形式と意味・機能（サブカテゴリー）との対応関係を見ると、Permissiveには動詞の可能形と評価的複合形式、Obligativeには評価的複合形式と助動詞によって表される。また、「～せざるをえない」「～ないわけにはいかない」などのその他の複合形式と呼ばれるものは、概念的には非許容系に相当

するので、ここでは考慮しない。

(2)－3 Epistemic modality

認識のモダリティのうち蓋然性を表すものはepistemicに相当し、証拠性を表すものはevidentialに相当する。このように、日本語のモーダルシステムにおいて認識のモダリティ（「推量系」のモダリティ）が占める比重が大きい。Epistemic modalityにおける可能性／必然性という二分立にあてはめると、「かもしれない」は可能性、「にちがいない」「はずだ」は必然性を表す。つまり、「かもしれない」はSpeculative、「にちがいない」「はずだ」はDeductiveに相当すると考えられる。先述したように英語のepistemic modalityにはSpeculative, Deductive以外にもAssumptiveというカテゴリーが存在するが、「だろう」は概念的にはAssumptiveに共通すると思われる。

(2)－4 Evidential modality

Evidential modalityのモーダルマーカの「ようだ」「みたいだ」「らしい」「(し) そうだ」「(する) そうだ」をReported（報告によるもの）とSensory（感覚によるもの）に分類すると、「ようだ」「みたいだ」「らしい」はReportedとSensoryの両方を表すことができる。一方、「(し) そうだ」はSensory、「(する) そうだ」はReportedを意味するという違いがある。また、Reportedにおける報告の仕方あるいはSensoryにおける証拠を得る方法によってモーダルマーカの使い分けはない。

(2)－5 EpistemicとEvidentialのモーダルマーカの形態論的定義

宮崎らはEpistemicやEvidentialを構成する「かもしれない」「はずだ」「ようだ」「らしい」などに対しては特に形態論的特徴によるカテゴリー化をしていない。これらのモーダルマーカは伝統的に英語のモーダル助動詞に倣って日本語のモダリティ研究ではすべて「助動詞」として扱われてきた（田窪 2005）。しかし、実際には助動詞と定義するのは難しいところがある。例えば、助動詞は必ず動詞と共起し、動詞の原形に接続する。また、否定や過去を表すときは「べきだった」「べきではない」というように、それ自体が変化をし、疑問を表す助詞「か」がそのまま接続して「～べきか」という疑問形を持つというように、動詞と類似する性質も持つ。

一方、EpistemicやEvidentialのマーカは、動詞に限らず形容詞、名詞も接続でき、

「～しないはずだ」「～したはずだ」というように、否定形や過去形が接続することもできる。「はずだ」は「はずだった」「はずはない」というように、それ自体が変化をして否定や過去を表すことがあるが、このような形をもてないものもある。また、疑問を表すときもそれ自体に疑問助詞を接続できず、「はずなのか」というように、名詞化をしてから疑問助詞を接続しなければならない。したがって、これらは助動詞と類似した性質と異なる性質を持つという意味で「助動詞相当形式」と定義される場合もある（例：中島，1999）。また、これらの形式が動詞だけでなく形容詞，名詞及びそれらの否定形，過去形にも接続することができるのは、これらがPropositional modalityのマーカであるからであると考えられる。以上の結果をまとめたものが図3である。

Possibility		
Event modality		Propositional modality
Dynamic possibility (Abilitive : 可能)	Deontic possibility (Permissive : 許容)	Epistemic possibility (Speculative)
～できる ～える，～られる	～できる ～てもいい	<u>～かもしれない</u>
Dynamic necessity (Volitive : 意思・勧誘)	Deontic necessity (Obligative : 必要妥当)	Epistemic necessity (Deductive)
～う，～よう ～たい	～といい ～なければならない ～べきだ ～ものだ	<u>～にちがいない</u> <u>～はずだ</u>
Event modality		Propositional modality
Necessity		

図3 Palmerの理論による日本語のモーダルシステム

太字：動詞活用形，イタリック体：評価的複合形式，
普通字体：助動詞，下線字体：助動詞相当形式

4. 中国語のモダリティ

4.1 中国語のモダリティ体系の研究

中国語のモダリティ研究において、モダリティとは「语气yǔ qì」（以下「語気」と呼ぶ）と呼ばれるのが一般的であるが、「語気」の定義は学者によってさまざまである。例えばLi & Thompson (1981) や北京大学現代漢語教研室 (2000) はムードを、Li (2003) は助動詞に限定したモーダルシステムのみをモダリティと定義している。

ムードとモーダルシステムの両方を包括的に扱ったものとしては、語法形式による表示を「語気」、語彙形式による表示を「情態qíng tài」と区別した張 (1959) の研究、モダリティを「表情語気」「表態語気」「表意語気」に分類し、語気は語気詞（語気助詞と感嘆詞）、語調（イントネーション）、語気を表す語詞（副詞など）によって表現されるとした胡 (1988) の研究などが見られる。中国語の自然言語を理解するため、形式と意味の結合原則を前提として、現代中国語の書き言葉における語気の体系を中心に検討している賀 (1992) の研究は、モダリティ体系を「機能語気」「評判語気」「感情語気」の3つに分類し、3種類の語気は互いに排斥しあうものではなく、同時に共起できるものであると考えている点で、Palmerのモダリティ論に近いと思われる。したがって、本研究では賀の研究を中心に中国語のモダリティ体系を概観し、Palmerの理論を適用して分析することとする。

4.2 賀によるモダリティ研究

下の図3は賀による中国語のモダリティ体系である。なお、原文は中国語で書かれているが使用した文献は既に日本語に訳されていたものなので、表記はそれに倣って日本語表記とする。以下、それぞれのモダリティについて説明するが、機能語気の「詠嘆語気」、
「認知語気」、
「感情語気」は類型論的モダリティ研究では普遍的なカテゴリーとして扱われていないので、本研究においても省略することとする。

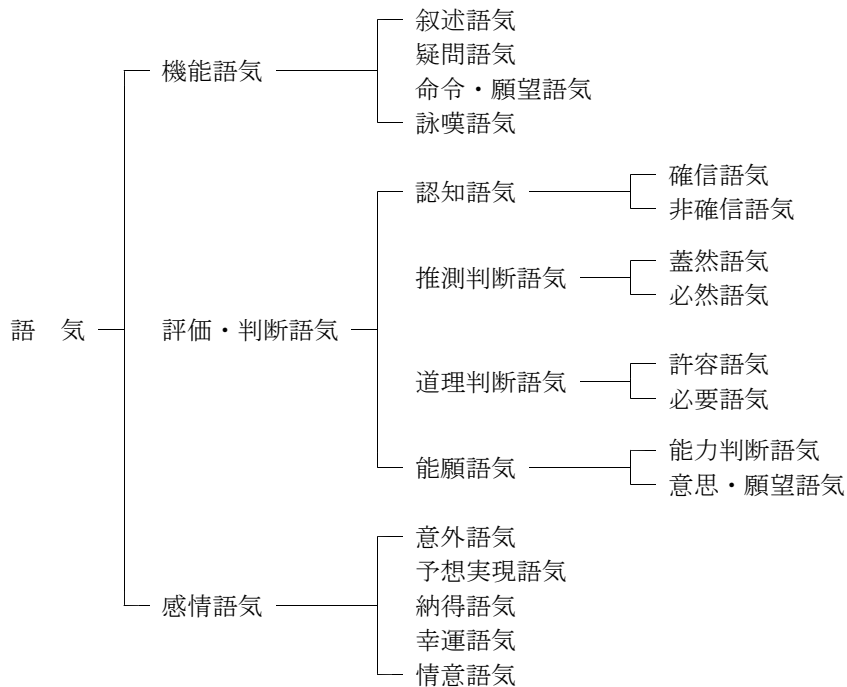


図4 賀によるモダリティ体系 (賀 1992)

なお、この研究においては文法的カテゴリーとして明記されていないが、談話において話者と聞き手の関係を表す文末助詞というものがある。文末助詞には「了le」, 「呢na」, 「吧ba」, 「啞òu」, 「啊a」, 「吗ma」がある。これらを文法的なシステムに属すると考えている (Li & Thompson, 1981, p. 238ff)。⁴⁾また、これらはしばしば語気と共起する。

4.1 賀 (1992) による中国語のモダリティ体系

(1) 機能語気

機能語気とは、言語コミュニケーションにおいて文が有する言語機能であり、話し手が文を用いて達成しようとするある種のコミュニケーション目的を表す。機能語気には叙述語気、疑問語気、命令・願望語気、詠嘆語気というサブカテゴリーがあるが、詠嘆語気は類型論的に普遍的なカテゴリーとは見なされていないのでここでは考慮しない。

(1) - 1 叙述語気

叙述語気は話し手のコミュニケーションの目的が聞き手に情報を提供することである。文末に句点「。」があり、しかも命令・願望語気を伴わない、いわゆる平叙文で、例えば、

次の文のようなものである。

他 昨天 到 上海 去 了。

tā zuótiān dào shànghǎi qù le。

彼 昨日 出かける 上海 行く (過去)

彼は昨日上海へ出かけた。

(1)－2 疑問語気

疑問語気には質問語気と反語語気がある。質問語気とはある事柄に関する情報が不足しているため、聞き手に情報提供を求める語気で、文末に疑問符「？」がある。これには「谁shuí/誰」「什么shénme/何」「哪nǎ/どれ」「怎么zěnmě/どのように」「几jǐ/いくつ」といった疑問詞を用いて話しての疑点を明示する「疑問詞疑問文」、話し手が聞き手に肯定か否低かの回答を求める「YES-NO疑問文」、いくつかの可能性について断定しかねるため話し手が聞き手にその中の一つを選択して回答することを求める「選択疑問文」、ある事柄が持つ肯定と否定の2つの可能性について判断しかねるために話し手が聞き手にその中の一つを選択して回答することを求める「反語疑問文」である。次の①～④はそれぞれ「疑問詞疑問文」、「YES-NO疑問文」、「選択疑問文」、「反語疑問文」の例である。

① 你 找 谁

nǐ zhǎo shuí ?

あなた さがす 誰？

あなた

は誰を探していますか？

② 你 听 懂 了 吗？

nǐ tīng dǒng le ma ?

あなた きく わかる (過去) (疑問助詞)

あなたは聞こえましたか？

③ 你 回 不 回 家?

nǐ huí bù huí jiā ?

あなた 帰る ~ない 帰る 家

あなたは家に帰りますか、帰りませんか？

④ 他 说 的 对 吗?

tā shuō de duì ma ?

彼 言う ~すること 正しい (疑問助詞)

彼が言うことは正しいですか？

疑問文には疑問を表す文末助詞と疑問符が付くのが一般的と見なされているが、これらの疑問文においてはつける必要がないし、疑問文のタイプによっては共起できるものとできないものがある。⁵⁾

(1)－3 命令・願望語気

命令・願望語気は聞き手にある行為をさせる、あるいはさせない（してもらう、あるいはしてもらわない）ことである。文末には句点「。」あるいは感嘆符「！」が付される。命令の要求は聞き手に向けられているので、主語は2人称単数あるいは複数である。したがって、他の多くの言語と同様、中国語においても最もプロトタイプの命令形は動詞句だけで表される。例えば次の文がそうである。

来！

Lái !

来る

来い！

しかし、述語語気や詠嘆語気を表さない文の機能語気は命令・願望語気であると見なされる。例えば、次の文のようなものである。

你 坐 这里。
nǐ zuò zhèlǐ。
あなた すわる ここ
ここに座れ！

そこで、命令・願望語気の弁別にはその語気の共起制限上の特徴をも考慮しなければならない。大まかに言えば、次のような共起制限がある。

- ① 動詞または動詞句的構造を述語とする叙述文にのみ現れ、形容詞を述語とする描写文や「是‘だ’」によって構成される文には現れない。
- ② 文中の主語になる第2人称の代名詞「你nǐ/あなた」「你们nǐmen/あなたたち」および第1人称複数の代名詞「我们wǒmen/わたしたち」とは共起するが、文中の主語になる第1人称単数の代名詞「我wǒmen/わたし」や第3人称の代名詞「他tā/彼」「他们tāmen/かれら」とは共起しない。
- ③ 否定を表す「別bié/～するな」「不要búyào/～する必要ない」、「不必búbi/～するまでもない」、「不用búyòng/～する必要ない」、「不可bùkě/～してはいけない」などと共起できるが、単独使用の「不bù/～ない」「没méi/～なかった」とは通常共起しない。これらのうち「別bié」は否定の命令助詞であるが、後者は否定助詞不と用（動詞）や必（形容詞）からなる複合語であるということである。
(Li & Thompson, 1981, p. 456-7)
- ④ 一般に「很hěn/とても」「最zui/最も」「非常fēicháng/非常に」「真zhēn/まことに」などの程度副詞とは共起しない。
- ⑤ 道理判断語気（後述）とは共起できるが、推測判断語気（後述）とは通常共起しない。

(2) 評価・判断語気

評価・判断語気は認知語気、推測判断語気、道理判断語気、能願語気の4種類に分けられる。このうち認知語気は類型論的には存在しないカテゴリーなのでここでは考慮しない。

(2) - 1 推測判断語気

文中の命題の真実性に対する話し手の推測と判断を表し、蓋然語気と必然語気から成る。

蓋然語気は文中の命題が恐らく真であるという話し手の推測を表す。助動詞「会hui/～だろう」「能néng/～だろう」「可能kě néng/～かもしれない」と語気副詞「也许yěxǔ/もしかしたら」「或许huòxǔ/多分」「大概dàgài/多分」などが蓋然語気を表す成分を担う。次の例①は助動詞、②は副詞を使って表現された蓋然語気の文である。

① 他 可能 知道 这件事。
tā kěnéng zhīdao zhèjiàn shì。
彼 かもしれない 知る この こと
彼はこのことを知っているかもしれない。

② 他 大概 知道 这件事。
tā dàgài zhīdao zhèjiàn shì。
彼 多分 知る この こと
彼は多分このことを知っている。

これらの文はともに「他 知道 这件事。」という平叙文の中、述語の前に助動詞や副詞が挿入されたものである。これが中国語の評価・判断語気の使用方である。以下の語気の説明においても文章の構造は基本的にこれらと同じなので、例文は提示しないことにする。

必然語気は命題が必ず真であり、偽ではないという話し手の推測を表す。語気副詞「一定yīdìng/きっと」「必然bìrán/必然的に」「必定bìdìng/間違いなく」などが必然語気を表す語気成分である。

(2)－2 道理判断語気

情理または客観的環境の制約の下で、話し手が文中の命題を実現するために取った態度を表し、許可語気と必要語気からなる。

許可語気は道義または客観的環境が文中の命題の実現を許し、またその命題を実現しないことも可能であるという話し手の考えを表すものである。助動詞「能néng/～することができる」「能够nénggòu/～することができる」「可以kěyǐ/～してもよい」が許可語気

を表す語気成分である。

必要語気は話し手が道義、情理或は客観的環境の求めるところにより、文中の命題を実現することが必要であり、その命題を実現しないことを許さないと考えることを表すものである。助動詞「应yīng/べきだ」「应该yīnggāi/べきだ」「应当yīngdāng/べきだ」「该gāi/べきだ」「要yào/～なければならない」「得děi/～なければならない」と語気副詞「必須bìxū/必ず」「一定yīdìng/必ず」「務必wùbì/ぜひ」が必要語気の成分である。

道理判断語気と推測判断語気は語気の種類が異なるだけでなく、共起関係も異なる。道理判断語気は命令・願望語気と共起するが、推測判断語気は一般に命令・願望語気と共起しない。命令・願望文における道理判断語気成分を推測判断語気成分に変えると、その文の気の動きも命令・願望語気から叙実語気が変わる。

(2) - 3 能願語気

能願語気は、能力や意思を表し、能力判断語気と意志・願望語気から成る。

能力判断語気はある人またはある物が文中の命題を実現させる能力または機能を有するか否かについて話し手の判断を表すものである。助動詞「能néng/～できる」「能够nénggòu/～できる」「可以kěyǐ/～できる」「会hui/～できる」が能力判断語気を表す語気成分である。

意志・願望語気は、ある人が文中の命題を実現させる意志と願望を有するか否かについて話し手の判断を表すものである。助動詞「肯kěn/進んで～する」「愿意yuànyì/～したい」「情意qíngyì/～したい」「乐意lèyì/喜んで～する」「想xiǎng/～したい」「要yào/～したい」及びそれらの否定形式と認められるものが意志・願望語気を表す語気成分である。

4.3 言語類型論から見た中国語のモダリティ体系

中国語のモダリティ体系においては、類型論的に見られる否定形や疑問形などを表すために語順変化 (Inversion) の手法はあまりとられない。例えば、否定形は動詞の前に否定助詞の「不bù/～ない」「没méi/～なかった」を付加したり、質問語気のところで述べたように、疑問を表す文末助詞を付加したり (北京大学, 2002, p. 349), 命令形も否定助

詞を付加するという方法で表現される。これらの助詞を付加する方法は語彙形態ではなく、文法形態の変化によってムードを表現するものだと中国語文法においては理解されている (Li & Thompson, 1981, p. 238)。

(1) ムード

中国語のムードは、機能語気によって表される。叙述語気は平叙文で表されるのでSubjunctive/Indicativeに対応していると思われる。疑問語気の中の質問語気は疑問のムード、命令・願望語気はImperative/Jussiveに相当する。願望という語は命令・願望語気と意思・願望語気に共通して見られる語であるが、両者の意味は同じではない。命令・願望語気における願望は、話者が聞き手に対して自分の願望を表明するもので、文中の主語は2人称者である。一方、意思・願望語気における願望は話者自身の願望を叙述しているだけであるから、文中の主語は話者自身(1人称単数)および話者を含むグループの人々(1人称複数)である。また、命令・願望語気の共起制限に「第3人称の代名詞とは共起しない」という項目があることから、Jussiveは中国語のムードにはないカテゴリーなのである。

また、これらは文法的変化によって表されるので、形態論的特徴からもムードであると確認される。叙述語気は平叙文あるいは否定文で表されるし、命令・願望語気は主語を省略したり動詞あるいは否定の命令を表す否定助詞を文頭にしたりというように語順変化(Inversion)によって表現される。また、疑問を表す疑問語気は終助詞を文末につける文で表現されるが、これらの終助詞は語彙ではなく文法カテゴリーとして認められている。

(2) モーダルシステム

モーダルシステムには評価・判断語気が相当する。Dynamicには能願語気、Deonticには道理判断語気、Epistemicには推測判断語気が相当するが、Evidentialに当たるものは賀の研究には含まれていない。

(2) - 1 Dynamic modality

Dynamicを意味するものは能願語気で、サブカテゴリーであるAbilitiveには能力判断語気、Volitiveには意思・願望語気が相当する。語彙形態によって分析すると、能願語気、意思・願望語気を表すモーダルマーカ―は助動詞である。しかし、これらの助動詞の中には他の学者によっては「能願動詞」と呼ばれる動詞と考えられるものがある。それらは能

力判断語気のうち、「肯kěn/進んで～する」「愿意yuàn yi/～したい」「情意qíng yi/～したい」「乐意lè yi/喜んで～する」「想xiǎng/～したい」などである。

ここで、中国語のモーダルシステムの大部分を占める助動詞の定義を行っておく必要がある。先述したLi (2003) の研究では、van der Auwera & Plugian (1998) の類型論的モダリティ論の枠組みによって英語と中国語のモーダルシステムの比較を行っているが、その中では助動詞だけをモーダルシステムを構成するマーカーとして認めている。Li (2003, p. 136) の定義によれば、助動詞とは動詞から派生した語彙形態で、副詞とも完全な動詞とも異なる性質を持つ。助動詞の性質は、英語のモーダル動詞のNICEと同様に頭文字の4つの字をとって作られたNORAという言葉で表される。それらは、‘Occurrence with verbs’, ‘Negation with 不bù’, ‘Reduplication disallowed’, ‘Aspect/tense markers not taken’⁶⁾である。このうち、1番目のものは動詞のような性質、2番目は助動詞と副詞を区別する性質、残りの2つは完全な動詞と異なる性質を意味している。その性質を満たすモーダル助動詞として認められているものは、「能néng」, 「能够nénggòu」, 「会hui」, 「可kě」, 「可以kěyǐ」, 「可能kěnéng」, 「得dé」, 「得děi」, 「得de」, 「要yào」, 「需要xūyào」, 「该gāi」, 「应该yīnggāi」, 「应yīng」, 「当dāng」, 「应当yīngdāng」の16個である。

そのように考えると、Dynamicのうち、Abilitiveは助動詞、Volitiveは能願動詞と助動詞で構成されている。以下、中国語のモーダルシステムにおける助動詞の定義はLiの定義に従うことにする。

(2) – 2 Deontic modality

Deonticを意味するものは道理判断語気で、そのうちPermissiveを表すものは許可語気、Obligativeを表すものは必要語気である。許可語気を表すマーカーは助動詞であるが、必要語気を表すマーカーには助動詞と語気副詞と呼ばれる副詞がある。

(2) – 3 Epistemic modality

Epistemicに相当するものは推測判断語気で、Speculativeには蓋然語気、Deductiveには必然語気が相当する。蓋然語気を表すマーカーには助動詞と副詞、必然語気は副詞で表される。Li (2003) は、Deonticを表す助動詞のうち、「该gāi」, 「应该yīnggāi」, 「得děi」, 「要yào」は、主要なEpistemicのマーカーではないが、Epistemic用法としての機能を認め

ている。したがって、必然語気も副詞と助動詞で構成されていると考えられる。

(2) - 4 Evidential modality

Evidential modalityに相当するものは賀の研究には見られなかった。このことは、中国語におけるevidential modalityの定義が原因であると思われる。中国語の文法においてevidential modalityのかわりに「传信范畴chuánxìn fānchóu」(Evidentiality)が存在する。これは、「情态范畴qíngtài fānchóu」と定義されているモダリティとは独立した文法範疇である。Evidentialityがモダリティとは別個のカテゴリーを構成しているのは、モダリティが主観性を表し、Evidentialityは客観的真實性をについて言及しているからだと考えられている(張, 2003, p. 46)。

伝信範疇は大まかに2種類に分けられる。狭義的なものは主に情報源と話しての客観真實性の概念の関係を扱い、広義的なものは話し手の態度および現実の肯定の強さをかねている。類型論的なEvidentialのサブカテゴリーであるSensoryとReportedに相当するもののみを取り上げると、次のようになる。Sensoryには「好像hǎoxiàng/～ようだ、らしい、みたいだ」、「恍huǎng/～ようだ、らしい、みたいだ」などの副詞が挙げられる。しかし、これらについて、どのような方法で証拠を得たかという区別はない。SensoryのVisualに相当するものには「看得kànde/見るところによると」、Auditoryに相当するものとしては「听说tīngshuō/聞くところによると」、「据说jùshuō/聞くところによると」という独立句で表現される。「听说tīngshuō」、「据说jùshuō」の区別は、前者は人から直接聞いたこと、後者はメディアから情報を得たことあるいは間接的に人から情報を得たことを意味するという違いがある。これらはReportedとしても使用され得る。また、これらの独立句とともに、「好像hǎoxiàng」、「恍huǎng」などの副詞が共起することもできる。例えば、次のような例である。

听说, 天 好像 有 下雨。
tīngshuō, tiān hǎoxiàng yǒu xiàyǔ。
聞く. 言う 天 ようだ ある 降る. 雨
聞くところ
によると, 雨が降るようだ。

以上、Palmerの理論によって中国語のモーダルシステムをまとめたものが図5である。

Possibility		
Event modality		Propositional modality
Dynamic possibility (Abilitive : 能力判断)	Deontic possibility (Permissive : 許可)	Epistemic possibility (Speculative : 蓋然)
能 néng, 能够 nénggòu, 会 huì, 可 kě, 可以 kěyǐ, 得 dé	能 néng, 能够 nénggòu, 可能 kěnéng 可 kě, 可以 kěyǐ	会 huì, 能 néng, 能够 nénggòu 得 dé, 可以 kěyǐ 可能 kěnéng, <i>也许 yě xǔ</i> <i>或许 huò xǔ</i> , <i>大概 dà gài</i>
Dynamic necessity (Volitive : 意思・願望)	Deontic necessity (Obligative : 必要)	Epistemic necessity (Deductive : 必然)
肯 kěn, 愿意 yuàn yì, 情意 qíng yì 乐意 lè yì 想 xiǎng 要 yào 需要 xūyào, 得 děi	要 yào, 该 gāi, 应该 yīnggāi, 应 yīng, 得 děi, 当 dāng 应当 yīngdāng 必须 bì xū 一定 yí dìng 务必 wù bì	该 gāi, 应该 yīnggāi, 得 děi, 要 yào 一定 yí dìng 必然 bì rán 必定 bì dìng
Event modality		Propositional modality
Necessity		

図3 Palmerの理論による中国語のモーダルシステム

太字：能願動詞，普通字体：助動詞，イタリック体：副詞

5. 日本語と中国語のモダリティの文法化の連続性について

5.1 文法化理論 (Grammaticalization) について

モーダルシステムが助動詞から成るというのはヨーロッパ言語の典型的な特徴であるが、限定的な特徴ではない。日本語と中国語のモーダルシステムにおいても助動詞、及び助動詞相当形式は重要な構成要素であるが、ヨーロッパ言語と違うのは、両言語においては助

動詞以外にも異なる語彙形態（あるいは文法形態）のマーカが存在するというのである。しかし、助動詞のモダリティのカテゴリーにおける分布の仕方を見ると、中国語においては、英語と同様、1つの助動詞が2つ以上のモダリティとして機能していることが分かる。例えば、「能」néng はAbilitive, Permissive, Speculativeのモーダルマーカとして分類されている。このように、1つのモーダルマーカが2つ以上のモダリティとしての機能を持つ、つまり多義性がある（Polysemy）と言う（Sweetser, 1991, p. 76）。日本語の助動詞及びその他のモーダルマーカを見ると、1つのモーダルマーカは1つのモダリティとしてしか機能しない傾向がある。つまり、日本語のモーダルマーカの形式と意味・機能の対応関係が分化しているということで、この点は言語個別的（language-specific）な特徴であるといえる。

先述したように、この多義性は文法化による意味拡張の結果であり、この文法化の考え方によれば中国語のモダリティの文法化の連続性は、Dynamic > Deontic > Epistemicで、言語普遍的（language-universal）である。一方、日本語においてはモーダルマーカが分化していることから、文法化の概念に従ってモダリティの発展順序を説明することはできない。唯一この考えが適用できるのは、助動詞ではなく動詞活用の可能形、「～える」「～られる」「～できる」がDynamicのAbilitiveとDeonticのPermissiveを表すことから、日本語のモダリティにおいてもDeontic possibilityがDynamic possibilityから派生した可能性があるということである。

ここで、もう一度文法化の概念について考える。文法化とは、語彙要素が動的、連続的に変化する過程を捉えることと定義されているが、語彙の意味の転用を意味するだけでなく、語彙形態の変化を表すのである。あらゆる言語において「内容語（content words）」あるいは「語彙項目（lexical items）」と「機能語（function words）」あるいは「文法語（grammatical words）」の、ある程度の区別があることは一般的に認められているが、内容語が機能語の持つ文法的資質を帯びるとき、その形式は、「文法化された（grammaticalized）」（Hopper&Traugott, 1993, p. 6）という。

文法化するのは、単一語の内容語ではなく、その語を含む構造全体である場合が多い。また、文法化した形式がすべて独立した語というわけではない。実際、ある言語では独立した語はなく、すべての語が、接辞あるいは他の文法範疇として他の語に付属して使われる。文法形式の定義については完全な一致が見られるわけではないが、一般的には「まとまり（cluster）」あるいは「焦点領域（focal area）」をもった「連続体（continuum）」と

してとらえることができ、前置詞のように音韻論的、統語論的に比較的独立を保った語、派生形式 (derivational forms)、接語 (clitics)、性、格、数、時制などの屈折語 (inflections) などがある (Bybee, 1985)。

ある形式が語彙形式から文法形式に文法化するとき、それは、名詞とか動詞といった主要な文法的範疇に認められるような形態論的・統語論的特性を失う傾向にある。そのような変化を極端から極端へ、範疇性の漸次変容として示すと次のようになる。

大きな文法範疇 > 形容詞・副詞 > 小さな文法範疇

大きな文法範疇というのは名詞と動詞であり (語彙的に比較的「開いた (open)」範疇)、小さな文法範疇とは前置詞・接続詞・助動詞・代名詞・指示代名詞である (比較的「閉じた (closed)」範疇)。形容詞と副詞は大きな範疇と小さな範疇の間であり、形容詞は分詞的動詞から、副詞は場所・様子を表す名詞から派生する場合がある (Hopper & Traugott, 1993, p. 27)。

5.2 文法化理論から見た日本語のモダリティの文法化の連続性

このような語彙形態の変化による文法化の概念に基づいて日本語のモーダルシステムを考えてみる。Dynamicは動詞活用形から派生した文法形態が語彙の意味を持つようになってものと考えられる。Deonticの評価的複合形式は、動詞活用変化に条件をあらわす助詞 (ば、と、ても、たら等) が接続した条件節と評価を表す形容詞 (いい、ならない、いけない等) との複合物であるから、文法形態から語彙形態への変容の途中に見られる形態である。したがって、Dynamic > Deonticという方向で発展したと考えることができる。

一般に、助動詞は動詞から派生したものであると思われているが、日本語においては名詞から派生したものであると考えられている。このことはこれらの助動詞の歴史的語彙変化の過程からわかる。例えば、Deonticの「ものだ」「ことだ」はそれぞれ形式名詞「もの」「こと」から発展したものである。また、「べきだ」は「はずだ」とともに推量を表す古代語「べし」から派生したもので、「べし」のepistemic用法 (「はずだ」に相当する) の方がDeontic用法 (「べきだ」に相当する) より早く現れている (Narrog, 2002)。

助動詞相当形式の文法化の歴史的変化については調査をしなければならないが、助動詞は動詞と共起しなければならないという制限があることから、動詞以外の形容詞、名詞に

接続することができる助動詞相当形式が、動詞以外から派生した可能性を否定できない。以上のことから、日本語のモーダルシステムにおいて、EpistemicはDeonticとは起源を別にし、文法化においてもDynamic>Deontic/Epistemic⁷⁾であり、類型論的に見た文法化の連続性においては言語個別的 (language-specific) な現象であると言える。また、助動詞に関してはむしろ、Epistemic>Deonticである可能性さえあると言える。

5.3 文法化理論から見た中国語のモダリティの文法化の連続性

次に、中国語のモーダルマーカの文法化理論によって説明する。文法化の理論に従えば、助動詞は動詞、副詞は名詞から派生したものである。まず、助動詞、副詞の分布を見ると、助動詞はDynamic, Deontic, Epistemicのモダリティすべてに分布している。また先述したように、Volitiveのモーダルマーカのうち、「肯kěn」, 「愿意yuànyì」, 「情意qíngyì」, 「乐意lèyì」, 「想xiǎng」は他の学者たちには助動詞ではなく動詞、特に能願動詞と定義されているもので、助動詞と違って動詞と共起しなくてもそれだけで動詞として機能するものである (Li, 2003, p. 114)。もしこれらのマーカを動詞と考えれば、動詞>助動詞ということから、Dynamic>Deonticということが考えられる。

次に、DeonticとEpistemicの関係を分析すると、どちらも助動詞と副詞から成り立っている。文法化理論によれば助動詞は動詞から、副詞は名詞から派生したものである。この違いを明確にするためには、中国語の助動詞と副詞の統語論的違いを考察する必要がある。

中国語のモーダルシステムのモダリティは、日本語の階層的モダリティ論と同様、文を「命題部分」とモダリティ部分に分けることができる。例えば先に用いた例で説明すれば、

他 大概 知道 这件 事。
tā dàgài zhīdao zhèjiàn shì。
彼 多分 知 这 个 事
彼は多分このことを知っている。

という文において、「他 知道 这件事。」という平叙文を「命題」部分、「大概」を「モダリティ」部分を考えることができ、命題部分をモダリティ部分が分断する形で命題中の述語（この場合は「知道」）を修飾する (于, 1996)。その際、助動詞は動詞のみを

修飾することができるのに対し、副詞は動詞のほかに、名詞、形容詞を修飾することができるという違いがある。

このような統語論的観点から考えると、Event modalityで常に行為の実現についての言及を表す、つまり述語は必ず動詞であるDeonticのマーカ―として助動詞と副詞が分類されるのは理解できるが、Propositional modalityで常に行為の実現についての言及を表すとは限らない、つまり動詞以外の品詞が述語になりうるEpistemicにおいて助動詞がモーダルマーカ―となりうる場合は限定されていると考えられる。事実、助動詞をEpistemicのマーカ―として認めたLi (2003) も、Epistemicの必然性を表すDeductiveを構成する助動詞の「该gāi」, 「应该yīnggāi」, 「得děi」, 「要yào」などは、Epistemicの意味を表すことはできるが、主要なEpistemicのマーカ―ではないと述べている。Liはまた、これらの助動詞がEpistemicとして解釈される場合は、行動を表す動詞ではなく「是shì」という存在を表す動詞 (Existential verb : 英語のbe動詞に相当する) が述語となる場合に限定されているとも述べている (Li, 2003, p. 144-50)。一方、LiによってEpistemicの助動詞と分類された「可能kěnéng」, 「应该yīnggāi」, 「该gāi」, 「应当yīngdāng」は、動詞以外を述語とする文を修飾することができることから、これらは副詞であるという見解 (例 : 呂, 1994) もある。これらのことから、Epistemicを表す助動詞は、意味拡張によって副詞的機能を持つようになった、つまりDeontic>Epistemicの順に派生したものであると考えることができる。

Deonticのマーカ―として機能する副詞の場合はこれとは逆に、名詞から派生した副詞が意味拡張によって助動詞的機能を持つようになったもの、つまりEpistemic>Deonticの順に派生したものと考えることができる。

このように、中国語のモダリティの文法化の連続性は、モーダルマーカ―の形態ごとに考える必要がある。動詞・助動詞の文法化について考えるとモダリティの文法化の連続性はDynamic>Deontic>Epistemicで言語普遍的 (language-universal) な現象であるが、副詞から考えるとEpistemic>Deonticであり、この点において日本語のDeonticの助動詞の文法化の方向性と共通する。

6. 日本語と中国語のモダリティにおける階層性

日本語と中国語のモーダルシステムが複数の形態のモーダルマーカ―によって構成され

ているということから、類型論的には見られない特徴として、階層的モダリティ論者が主張するようなモダリティの階層性 (hierarchy) という現象が見られる。Huddlestonが主張しているように、‘He may can agree with us.’のように英語などのモーダル助動詞同士が共起することはできない。一方日本語においては、次の例のような文が成立する。

例：彼は同意できるかもしれない。

このように、「できる」というDynamicのモダリティに「かもしれない」というEpistemicのモダリティが接続することができる。また、他にも「～しなければならないかもしれない」というように、DeonticにEpistemicのモダリティが接続することができる。しかし、「～できなければならない」という言い方はできないように、DynamicとDeonticが共起することはできない (守屋・堀江, 2004)。

これらの文において、「かもしれない」「そうだ」「らしい」などは常に話者の主観性を表し、「できる」「なければならない」客観的意味を表す場合がある (命題になりうる) ことから、常に主観性を表す前者のモダリティの方が上位概念である、つまり階層性をなしている (益岡, 1991, p. 34) と考えられている。

そして、上位概念であると考えられるのは、日本語学においていわゆる「推量のモダリティ」であることから、日本語のモダリティにおいては「推量のモダリティ」が異常に発達していると言える。このことは、先述したように日本語には「だろう」のような「推量のムード」という特殊なカテゴリーのムードが存在することでも証明されている。

中国語のモダリティにおいても同様の現象、つまりDynamicやDeonticとEpistemicのモダリティが共起するという現象が見られる。例えば、次の文は上の例文の中国語訳であるが、この文においてもDynamicを表す「会hui」とEpistemicの「大概dagai」が共起している例である。

他 大概 会 同意 的。
tā dàgài huì tóngyì de。
彼 かもしれない できる 同意する
彼は同意できるかもしれない。

この例文においても、「他 会 同意 的」は命題部分で、「大概」はモダリティと考えられ、常に話者の主観性を表す「大概」は命題部分になりうる「会」よりも上位概念であると考えられる（于，1996，1998）。

Palmerの類型論的モダリティ研究の優れた点は、文法形態で表されるムードと法助動詞などの語彙形態によって表されるモーダルシステムから成り立っており、これらの複数の形態は互いに排他的ではないと考えている点であった。これによって他のモダリティ研究では説明し切れなかったムードとモーダルシステムの共起を矛盾なく説明することができた。反面、モーダルシステム内でのモーダルマーカータ同士の共起しないと考えていたが、日本語と中国語は異なる形態のモーダルマーカが存在することからあるマーカが他のマーカの上位概念となる場合がある、つまり階層的モダリティ論者が主張するようなモダリティの中の階層性がモーダルシステムの中にも存在することがわかった。この階層性に基づくと、日本語と中国語のモダリティにおいて、EpistemicはDynamicとDeonticよりも上位概念であると言える。このことは、「日本語において『推量のモダリティ』が発達している」という見解と合致しているが、中国語においても「推量のモダリティ」が発達しているということが言えるのではないだろうか。

7. 終わりに

以上、言語類型論の観点から日本語と中国語のモダリティの比較・対照を行った結果、次のことがわかった。①日本語と中国語においては形態の異なる複数のモーダルマーカがモーダルシステムを構成していること、②中国語のモーダルマーカ（特に助動詞）は多義性を持つが、日本語のモーダルマーカは形式と意味・機能が比較的分化していること、③モダリティの文法化の連続性は日本語においては類型論的に言われているようなdynamic>deontic>epistemicではなく、dynamic>deontic/epistemicであるということ、中国語においては助動詞はdynamic>deontic>epistemicであること、しかし、日本語の助動詞と中国語の副詞についてはepistemic>deonticであるかもしれないということ、④日本語と中国語のモーダルシステムにおいて、モダリティの階層性が存在し、EpistemicはDynamicやDeonticの上位概念であることということ、などがわかった。

第二言語の文法形式の習得において、学習者は文法形式の意味・機能と形式を一致させながら習得したその過程において自分の母語の文法形式との対照を基盤としていると考えられている (Larsen-Freeman and Long, 1991)。したがって、第一言語と第二言語の文法形式が似ているものは習得しやすいが、そうでないものは習得が難しいことが予想される。このことは、中国人日本語学習者のモダリティ習得の難しさは先述した考察の②、③のためであるということを示唆している。今後は、中国人日本語学習者のモダリティ習得に関して、日本語と中国語のモダリティにおいて形式と意味・機能の対応関係が似ているもの（例えば両言語において1つのモーダルマーカで表されるモダリティ）は習得しやすいか、また異なるものは（例えば日本語では2つ、中国語では1つのマーカで表されるモダリティ、あるいはその逆）はどのように習得するかを調査したいと考えている。そのためにはまず、日本語のどのモーダルマーカが中国語のどのモーダルマーカと対応しているかということ対訳コーパスを基にした検証を試みる。

注

- 1) Mithum (1999, p. 173) によれば, Irrealisは「純粹に思考の範囲内, または想像によって知ることのできる状況の記述」で, Realisは「実現化される, あるいは起こったこと, 起こっていることなどの状況の記述, 直接知覚によって知ることのできることを意味する。
- 2) Codeとは, 'Can I have a pen?'という質問に対して'Yes, you can.'という返答によって実際には'You can have a pen.'という内容を示すことができること, Emphatic affirmationとは, 'You can have a pen.'のcanという助動詞のイントネーションを強調することで強い同意を表すことである。
- 3) Dynamic>DeonticはDynamicからDeonticが派生したということの意味する。
- 4) 多くの言語ではモーダル助詞が存在するが, 直接談話に關係しておらず, 文法的なシステムに属するとは考えられていない (Palmer, 2001, p. 69)。中国語において文末助詞が文法カテゴリーと考えられていることは類型論的に見て注目に値する。
- 5) 疑問詞疑問文には文末助詞「呢na」「啊a」を共起させることはできるが, 「吗ma」を共起させることはできない。「YES-NO疑問文」には「吗ma」「啊a」は共起するが, 「呢na」はできない。「選択疑問文」には「呢na」「啊a」を共起させることはできるが, 「吗ma」を共起させることはできない。「反語疑問文」VO不VO, VO不V, V不VOのような特殊な文の形式を用い, 疑問詞は共起しない。
- 6) これらを日本語に訳すと, それぞれ「動詞と共起する」「不bù (否定助詞)を用いて否定を表す」「複製は許されない」「アスペクト/テンスのマーカは取られない」となる。
- 7) Deontic/Epistemicは, 派生關係がないことを意味している。

参考文献

赤塚紀子 (1998) 条件文とDesirabilityの仮説, 2-94, モダリティと発話行為 (赤塚紀子・塚本篤朗 編) 研究社出版

- Bybee, J. (1985) Morphology : a study of the relation between meaning and form, *Typological studies in language* 9. John Benjamins.
- Bybee, J. & Fleischman, S. (1995a) Modality and Grammar in Discourse, *Typological studies in language* 32. John Benjamins.
- Bybee, J. et al. (1994). The evolution of grammar : tense, aspect and modality in the languages of the world. University of Chicago Press.
- 张秀 (1959) 汉语助动词的‘语气’系统, 27-54, 语法论文集 第3集 中文杂志公司.
- 张谊生 (2003) 现代汉语副词研究, 学林出版社
- Comrie, B. (2003) Typology and language acquisition : The cases of relative clauses’ In : *Typology and second language acquisition*. Ramat, A. G. (ed.) Mouton de Gruyter. , 11-34
- Fillmore, C. (1968) The case for case. In : *Universals in linguistic theory*. Bach, E. & Harms, R. T. (eds.) Holt, Rinehart and Winston, Inc. 56-89
- 賀 陽 (1992) 中国語の書き言葉における語気の体系 (訳・于康/成田静香) 于康・張勤編 語気詞と語気 好文出版 157-176.
- Givon, T. (1994) Irrealis and the subjunctive. *Studies in Language* 6. 23-49.
- Heine, B. (1993) Auxiliaries, cognitive forces and grammaticalization. Oxford University Press.
- Hopper, P. J. & Traugott, E. C. (1993) Grammaticalization. Cambridge University Press.
- Huddleston, R. (1976) Some theoretical issues in the description of the English verb *Lingua* 40 : 331-83.
- 胡明恂 (1988) 语气助词的语气意义 汉语学习 第6期
- Larsen-Freeman, D. and Long, M. H. (1991) An introduction to second language acquisition research. Longman.
- Li, C. N. & Thompson, S. A. (1981) Mandarin Chinese : a functional reference grammar. University of California Press.
- Li, R. (2003) Modality in English and Chinese : A typological perspective. Lighting Source Inc.
- Lyons, J. (1968) Introduction of theoretical linguistics, Cambridge University Press.
- Lyons, J. (1977) Semantics. 2 vols. Cambridge University Press.
- 益岡隆志 (1987) 命題の文法 くろしお出版.
- 益岡隆志 (1991) モダリティの文法 くろしお出版.
- Mithun, M. (1999) The languages of native North America. Cambridge University Press.
- 宮崎和人他 (2002) モダリティ くろしお出版
- 守屋哲治・堀江 薫 (2004) 日英語のモダリティ体系に見られる意味変化の方向性の違い 言語処理学会第10回年次大会論文集 185-88.
- 中島孝幸 (1999) 当然を表すモダリティ形式について—ハズダとベキダ— 甲南大学紀要文学編 111, 左15-28
- 中右 実 (1994) 認知意味論の原理 大修館
- Narrog, H. (2002a) 意味論的カテゴリーとしてのモダリティ 認知言語学 2 カテゴリー化 大堀としお編 東京大学出版会 217-251
- Narrog, H. (2002b) Polysemy and indeterminacy in modal markers—The case of Japanese BESHİ’, *Journal of East Asian Linguistics* 11, 123-167.
- Narrog, H. (2005) On defining modality again. *Language Sciences Fall 2005*. (forthcoming).
- 仁田義雄 (1989) 文の構造 北原保雄編 講座日本語と日本語教育 4 明治書院 25-52.
- 仁田義雄 (1997) 日本語文法研究序説 くろしお出版

- 野村 剛 (2003) モダリティ形式の分類 国語学54-1 17-31.
- Nordlinger, R. & Traugott, E. C. (1997) Scope and the development of epistemic modality: Evidence from 'ought to'. *English Language and Linguistics* 1. 295-317
- Onins, C. T. et al. (1966) ODEE (The Oxford Dictionary of English Etymology) Oxford University Press. Rpt. in 1969.
- Palmer, F. R. (1986) Mood and modality. Cambridge University Press.
- Palmer, F. R. (1990) Modality and the English modals. Cambridge University Press.
- Palmer, F. R. (2001) Mood and modality 2nd edition. Cambridge University Press.
- 北京大学現代漢語教研室 (2000) 現代中国語総説 (訳 松岡栄志・古川 裕) 三省堂
- 呂叔湘 (1994) 中国文法要略 中卷 商务印书馆
- Sweetser, E. E. (1991) From etymology to pragmatics metaphorical and cultural aspects of semantic structure. Cambridge University Press.
- 田窪行則 (2005) 日本語の2種のモーダル助動詞: 推論の2つの方向性 日本言語処理学会第11回 年次大会招待講演
- Talmy, L. (1998) Force dynamics in language and cognition. *Cognitive Science* 2, 49-100
- 于康 (1998) 現代中国語のモダリティ構造の階層性 言語と文化 第2号 関西学院大学言語教育 研究センター 25-37
- 于康 (1996) 命題内成分と命題外成分 - 以汉语助动词例 世界汉语教学 第35期
- van der Auwera, J. & Plugian, V. (1998) Modality's semantic map. *Linguistic Typology* 2 79-124.

高松大学紀要
第 44 号

平成17年 9月25日 印刷
平成17年 9月28日 発行

編集発行 高松大学
高松短期大学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841-3255
FAX (087) 841-3064

印刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町1-8-10
TEL (087) 833-5811